（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　　辛　　炫　承

本論文は、中国明代末期に活躍した学者官僚劉宗周（1578-1645）の思想を、彼の周囲にいた知識人たちとの交流を通して分析したものである。序説で問題構成と研究史回顧がなされたのち、本論は全五章からなる構成をとる。

第一章「人物と家族史」は劉宗周一族の伝記。第二章「劉宗周とその周辺人物たち」は彼の交友関係や門流の紹介である。第三章「劉宗周と地域及び明末思想界」では、前二章をうけて当時の思潮を概観したのち、劉宗周が郷里浙江省東部の地域社会で行った諸活動や、順天府（北京）知事として構想した郷約保甲制（治安組織）の意義を考察する。第四章「劉宗周と宋明儒学との関係」では、彼の内面に分け入って思想の基本構造を整理し、朱子学・陽明学への批評とその意義を考察する。さらに、彼の宗族（男系血縁組織）論を分析する。第五章「劉宗周の学問活動とその思想」は、彼の政治思想と歴史観を通してのちの浙東学派とのつながりを展望し、また、彼が信奉する「正学（正しい学術）」の具体相を明らかにして、彼の思想実践の論理のなかにそれを位置づける。「結びに」では、本論を要約したうえで今後に残された課題を自己批判的に述べている。

このように、本論文は劉宗周なる人物を多方面から捉え、その思想の全体像を描こうとした意欲作である。劉宗周の思想を扱った論著は内外にすでに多数存在するが、本論文は社会史的視点も加えて彼の思想史的位置づけを試みており、きわめて独創的で研究史上も意義深い成果と評することができる。とりわけ、『人譜』を精密に解読することにより行われた劉宗周の「改過（過ちを改める）」思想の分析は、従来から彼の思想の特徴として指摘されてきた「慎独（独りを慎む）」「誠意（意を誠にする）」に重きを置く修養実践論に、こうした現実的な方法の裏付けがあることを実証している。

著者自身「結びに」で言及しているように、黄宗羲という、現在にいたる劉宗周思想の評価枠組を作った門人については、本論文では分析が加えられていない。また、これも著者が述べるとおり、劉宗周の系譜を引くとされる学派の存在可能性に対しても、史料解析作業はこれからである。本論文にはこのように未完成の課題がいくつか残されている。だが、本論文で示した成果と研究手法を自分なりにさらに発展させるならば、学界に対して多大な貢献をすることになろう。そのために必要な視座と学識は、本論文においてすでに充分披露されている。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい水準に達しているものと判断する。